

## 第7回テニス 昔、今、将来

商事 織田 和雄

1999年11月16日(木)、三菱商事ビル別館、参加51名

### 略歴

- ・昭和10年(1935年)11月2日、神戸生出身
- ・学習院大学、慶応大学院、米国クレアモント大学院を卒業し、昭和36年(1961年)三菱商事へ入社
- ・東京都テニス協会理事長、日本テニス協会評議員
- ・全日本ベテラン、毎トーで複優勝。



織田でございます。

本来テニスというのは王侯貴族のスポーツであり、ウィンブルドンではプレーヤー2人の為に18人の人間が従事すると言われていますが、億単位のファイトマネーが懸かるヘビー級のボクシングでもそれほどの人数は割けないでしょう。しかし、時代の流れと共に一般化が進む中、これからの21世紀にはどういったテニス界を志向するべきなのか、今日の講話会では特に若い方達にお話をさせて戴きたいと思います。

最近若い方とベテランの関係が希薄になってきていると感じることが多いのですが、若い方においても過去に学ぶことは非常に大切だと思うので、こういった場で色々な話を紹介させていただければと思います。

さて今回の講話会に際し、テニスの流れをつかむ為に「テニス年表」を作ってみました。この表を見れば、世界、日本、そして三菱のテニスの流れがわかる仕組みになっています。先ずウィンブルドンは1877年に第一回大会が開催されましたが、その年に日本では東京大学が開学されています。全豪オープンは1905年に、デビスカップは1921年に始まっていますが、日本国内では1890年に、高等師範学校(現筑波大)と高等商業学校(現一橋大)の対抗戦が最古の公式試合記録として残っています。インターハイは1910年に開始され、今年の岐阜インターハイは90周年の記念大会でありました。

歴史的には全日本テニス選手権(1922年)より、毎トー(毎日テニストーナメント)の方が古く、1919年から始まっています。来年、同トーナメントは80周年を迎えるわけですが、大規模な記念行事を考えている様です。

世界の政治舞台では1920年にワシントン海軍軍縮会議が開催されていますが、その頃国際テニス連盟(ITF)が誕生しています。日本では、1922年に日本庭球協会(JTA)、1931年に全日本学生庭球連盟が発足し、1933年にインカレ(全日本学生テニス選手権)、1935年に全日本ベテラン(45才以上)がスタートしました。当時の嬉しい事としては1934年のウィンブルドンで三木選手がミックスで優勝しています。又、1955年には宮城・加茂ペアが全米ダブルスで優勝し、その年は米国の選手がデビスカップに出場していた為優勝できたんだと言う人もいましたが、ともかく素晴らしい実績だったと思います。

1959年頃から「ミッチーブーム」が社会現象として起こり、テニスの繁栄に大きく貢献したと思います。皇太子ご夫妻のテニスコート上で咲いた恋ということで、テニスに関心

が集まった時代です。新幹線が開通し、東京オリンピックが開催された1964年当時は、ウィンブルドンのみ優勝できなかった豪国のローズウォール選手や、グランドスラムを達成したレーバー選手が日本選手の目標となりました。

その後、第二次テニスブームがあったのは、私が米国駐在から帰ってきて2、3年後のことですが、テニスラケットを持って若い女性が原宿を歩いている姿をよく見かけたものです。この現象は、ウィンブルドンで沢松和子さんが女子ダブルスで優勝したことや、ボルグ選手のかっこよさ、更にテニスの高いファッション性に若い方が惹かれたということでしょうか。

1980年に入り世の中はバブル時代に突入しますが、選手にとっては良き時代であり、1972年に日本でもプロ協会が発足、ATP、WTAなどプロの組織が確立された時期です。石黒さんなどが先導して体制の強化が行われ、スポンサーもどんどん付く時代でした。しかしながら、今考えてみるとそれが日本テニス、特に男子の流れを止めたのではないかと思います。その後の有名選手を見ると、松岡君を除いて女性がメインになってきているわけで、80年代以降、日本国内でサーキットを回っていれば十分な収入が貰えるようになってしまったことが原因で、世界を志す選手が少なくなったのだと思います。男性で世界で名を馳せるためには、極めて競争が激しい世界で勝ち抜かなければいけない訳で、多少失礼かもしれませんが、男性は生活の収入を稼がなければいけないという意識が強い一方、女性は居直ることができ大変思い切りが良いようです。

1946年には国体が始まりました。現在の成年男子は、一般・ベテランの混合チームですが、2001年からは45歳以上男子を区別し「国体マスターズ」という大会に変更されます。都市対抗については今年から、45歳以上の女子ダブルスを入れることになっています。フェドカップは1963年から始まっています。ジャパンオープンは1972年、セイコースーパーは1978年に開始されました。1968年には女子連が発足しましたが、現在は会員数3万9千人に及ぶ大組織で、朝日レディースを始めとした大会への参加や、各大会の審判などを務めて頂いております。なお、国際審判にはゴールド、シルバー、ブロンズといった区別があり、サテライト大会でもブロンズを持っていないと審判を行うことが出来ません。ITFの規約によると、35歳までにブロンズを取らないとそれ以上の資格が取れないというルールがあり、日本国内で国際大会の審判数が少ない原因になっています。1983年には学生同好会連盟が発足しています。

さて、実業団についてですが、関西テニス協会が主催していた片岡杯という大会が最古の記録に残っている試合です。1962年には東京都実業団リーグが発足し、三菱グループ企業も多く参加していました。そして1987年に日本リーグがスタートしました。当時、私は東京都実業団の副委員長をしておりましたが、「三菱商事、協和発酵などJOP選手のいない企業は、日本リーグには参加出来ない」という方針の日本リーグ側と一橋の如水会館で大激論となり、私からは「どんな有名選手であっても何時までもJOPランキングを持ってはいられないし、栄枯盛衰がある」とたんかを切り、最終的には三菱グループの企業も日本リーグへの参加が認められました。三菱化成、三菱商事、三菱重工などが参加し活躍しま

したが、参加選手には、「日本リーグに出ることが会社の宣伝になればいい」、「福利厚生でたまたまテニスをしていて自分の力を試せばいい」、「その中間」といった3パターンがあった様です。但し、テニスの宣伝は難しく、試合の結果くらいは載せてくれましたが、何か目玉になるものが欲しいと相談されたことがあり、三菱商事からは外人を出そうと提案しましたが、一部の会社からクレームがきました。私は「海外企業に買収された場合はどうするのか」などと説得し、外人枠が出来、現在はそれ以外にプロも一名であれば出場可能となっています。

最近のデビスカップ、フェドカップ等の大会は国内では観客があまり来なくなっています。昔のデビスカップ選手は高校、大学の主流選手が代表選手になっていましたが、最近では若年化が進んでおり、高校を出たところでプロになる選手が多く、なじみが薄くなっているのも一因と思われます。例えば、サッカーチームの鹿島アントラーズでも当初500人しか観客が来なかったが、地元を大切にすることで回復が出来たと聞きます。テニスも見習う点があると思います。

さて、ルールについてですが、「90秒ルール」はアメリカのメディアからのCMを入れる為の要望に応えたという背景があります。但し、スコアカードをめくる時から90秒カウントするのか、戻って椅子に座ってからカウントするのかわるケースもある様です。また、8ゲームマッチ、ノーアドバンテージ、ノーレットなどITFから幾つかの要請が来ましたが、ノーレットは一般的に受け入れがたく、難しいと思っています。また、今後ショートセット方式が始まりますが、今年の全日本テニス選手権のミックスでも採用されており、来年の都市対抗でも採用の予定です。基本的には女子の試合を対象に、セットを短くするという事で観客を厭きさせない工夫が必要というのがITFの考えの様です。それに加えてセットブレイクルールへの変更も行われました。

また、ボールの規格を見直そうという動きもあります。即ち、芝やカーペットコートでは大きめ柔らかめのボール、クレーでは小さく軽いボールを使おうというものです。しかし、まだ一般的ではないし、ダンロップ社では対応が厳しいという話を聞いたことがあります。

次に、大会の出場費用などについてお話ししましょう。1958年の関東オープンでは出場料金は一人400円でしたが、現在は1万円ですから25倍です。企業の給料と比しても割高になっています。その原因はコート代の高騰や選手への日当配布といった事もありますが、一番大きいのは大会運営協力者への日当だと思います。これは低減させないといけないと考えており、現在の参加費用で何とかまわせるように遣り繰りしていきたいと思っています。また、日本テニス協会も財政は大変厳しい状況であり、以前、佐久間三菱重工副社長がHI盃の際に呼びかけをし、三菱グループからも上納金を出しましたが、それも取り崩しが進んでいます。

さて、日本のテニスではプロとアマの実力差が少なく、最近のランキングを見てもアマも上位に食い込んでいますが、これではプロの勝負強さは鍛えられないと思います。先ほどもお話ししましたが、国内で稼げてしまい海外に出る機会を逸しているという背景から甘えが出ているように思います。私も東京都テニス協会の理事長をしている関係でジュニアからプロまで多くの試合を見ますが、最近の若い選手には目の覚めるようなプレーをする

選手や、一つでも絶対に自信を持っている技術を持つ選手が少ない様に見えます。世界の壁を破っていくには「武器」、すなわち誰にも負けない得意技を持つ必要がある訳で、私はそういった「武器」をどうやって若い選手に身に付けもらうのかをいつも考えています。例えば、若い選手を対象としたポイントランキング制を廃止してはどうかと思います。(特に10歳～15歳位迄の)伸び伸びとテニスをする環境を確保してあげたいという考えですが、一度始まったことはそれに関係する人が多くいるわけで、中々変更出来ない様です

最後になりましたが、今後の三菱のテニスをどう考えるかという事について少しお話ししたいと思います。そして、これは「若い人に任せる」という事に尽きると思います。

三菱のテニスも企業連携、IT時代の進展、少子化時代などの背景を受け、新しいスタイルに生まれ変わる必要があると思いますが、人と人のふれあいが基本にあることは変わらないと思います。そもそも、HI 盃は岩崎様を中心に、三菱の一員として皆が助けあって仲良くやっていこうという趣旨のもとに始まったものと考えていますし、私もこういった考えには大賛成です。10年経って環境が変わっても、こういった精神は変わらずにいたいものです。

最近、若い人のテニス参加率が下がってきていますが、伊達公子さんの「カモンキッズ」には何とかして公立中学校、高校で硬式テニスを採用して欲しいという願いがあります。そうした中、先日沖縄の公立中学校でテニスが採用されることになりましたが、27年掛かったそうです。サミットもあり、伊達さんや沖縄出身のテニス選手が説得したそうですが、軟式が大きな政治力を持っているのと極めて対象的です。日本テニス協会のそういった部分の強化も一つの課題だと思います。

蛇足ですが、私がやっている「グランドスラム基金」は、日本選手がグランドスラムにストレートインするのに必要なATPポイントを獲得出来る試合を、日本国内で開催出来る様にと基金集めを始めたものです。テニス協会も資金が必要ですので、クラブJTA、JTAドネーションの企画も始まっています。

また、知恵遅れの子供にスポーツをさせるスペシャルオリンピック、これはケネディ家の呼びかけで始まったものですが、欧米で大変盛んなこのイベントのお手伝いもしています。ソニー生命の盛田さんにもご協力頂き活動していますが、多種のスポーツがあり、私はスケートを教えています。いずれはテニスも加えたいと思っていますので、日曜日に2面程度コートを貸してくれるところ、更には一緒にお手伝いをしてくれる方がいらっしゃれば是非お声をおかけ頂きたいと思います。身体障害者と違い、知恵遅れの方は理解が遅いので、指導が本当に大変です。私が教えている少年がスケートを滑れるようになりましたが、大変嬉しく一つの恩返しと思っています。

\*文中にある「テニス年表」は、本記念誌の「三菱庭球の歩み(1914～2001)」として別掲載させていただいております。